

龍谷

Ryukoku

2016 No.81

100年を見据えて
育てる命
生かす心



C O N T E N T S

- 01** P01
Feature Article 巻頭特集 学長対談
100年を見据えて
育てる命 生かす心
中川 典子 さん × 赤松 徹真 学長
- 02** P06
5長 News
5長計画の後期事業「第2期中期計画」における成果
- 03** P07
Ryukoku Event
- 04** P08
People, Unlimited
凜とした芸に憧れ
百万石金沢の文化継承の職を選ぶ
石井 愛美 さん 文学部
- P10
People, Unlimited
“はんだ” でアート
コンテスト 2年連続優勝
山本 滉平 さん 理工学部
- P12
People, Unlimited
「たのくるしく走る」めざすは世界
Le Tour de France
柴田 雅之 さん 理工学部
- 05** P14
Education, Unlimited
「個」だけでなく「群」を見て
農業の可能性を探る
大門 弘幸 教授 農学部
- P18
Education, Unlimited
地域活性化には
文化財のもつ力が必要だ
浦西 勉 教授 文学部
- P22
Education, Unlimited
健康促進を焦点に社会コミュニティを考える
「健康なまちづくりプロジェクト」
井上 辰樹 教授 社会学部
- 06** P26
World, Unlimited
海を越えたフィールドワーク
東アジア環境政策の希望を探りたい
政策学部 南京 PBL(Project Based Learning)
- 07** P30
Event Ryukoku Museum
水に宿る神仏、その神秘に触れる
村松 加奈子 龍谷ミュージアム学芸員
- P32
第13回青春俳句大賞
- 08** P34
People, Unlimited 龍谷人
最高のチームで
史上初の4連覇に挑戦
岩下 知永 さん 日本生命保険相互会社野球部
- P36
People, Unlimited 龍谷人
四国のNHKに
“愛されキャラクター” 登場
西村 唯 さん NHK高知放送局キャスター
- P38
People, Unlimited 龍谷人
Googleで見る世界と日本の潮流
三浦 正剛 さん グーグル株式会社
マーチャンダイジングマネージャー Google Play
- 09** P40
News & Topics
最新情報
- 10** P47
Book Café
新刊紹介

01 | Feature Article

巻頭特集 学長対談

100年を見据えて 育てる命 生かす心

銘木師

中川 典子
×

龍谷大学学長
赤松 徹眞



Feature
Article

People
Unlimited

Education
Unlimited

World
Unlimited

People
Unlimited 龍谷人

News &
Topics



中川 典子 なかがわ のりこ

銘木師。(株)千本銘木商会。1970年京都市生まれ。大阪芸術大学卒業。茶道美術図書出版社を経て、岐阜、吉野、故・木下孝一棟梁のもとで修業の後、実家の千本銘木商会に入社。当時、女性が銘木の仕事に就くなど前例がなく、男社会のなかで苦労を重ねた。2013年、木下棟梁らの推薦で「銘木師」に。2015年には上賀茂神社の式年遷宮文化行事に奉仕。日本一長い8メートルの大絵馬復元のほか、食品メーカーと連携で、バリスタのコーヒーブースの木のコーディネートと加工、製作をした。

創業294年の老舗・酢屋 千本銘木商會を継ぐ中川典子氏。女性で初めての「銘木師」。木とともに生きる中川氏が、赤松学長と語り合った。

いただいた命を養って生かす

赤松 経済主体のグローバル化が加速するなか、効率や合理性が重視されがちです。しかし現代人は「長い目で見ると」ことの大切さを見失っていないでしょうか。木を育てて生かす銘木師として、どうぞ覧になっていますか。

中川 林業は100年単位の仕事で、祖父の植えた木が孫の代で目の目を見るときといわれます。また、銘木屋の仕事も伐ってすぐには使えません。木はよく乾かす必要があるからです。その乾かす期間を「養生」と言います。現代では、機械化して人工乾燥で早めることもできますが、どうしても色が損なわれます。やはり自然乾燥がよく、とくに銘木はよい環境でゆっくり自然乾燥させてあげたい。それには3~5年の歳月が必要です。この「養って生かす」時間を待つことが、今の経済の流れではなかなか難しいのが実情です。

赤松 大学の人財育成にも通じます。大学で学ぶ数年は人生の「養生」にあたる大事な時期。促成栽培的な観点を離れ、長いスパンで一人ひとりの人間としての成長過程を見守ることが必要だと思えます。本学も10年計画での大学ビジョンを見据えて龍谷大学ラーニングコモンズを開設して、自主的な学びやアクションが育つ環境づくりをめざしています。そのなかで、ときにはあえて手を出さずに見守り続けることも、学生が自ら育つ力を養う大事な智慧だと考えています。

中川 「銘木屋は木の命をいただく仕事」と申し

ます。木の命をいただくということは、自らが問われることでもあります。この木の第二の人生をつくるのは自分だという使命感、責任感があります。酢屋・千本銘木の仕事は爪楊枝から文化財まで幅広いのですが、どれも木の命をいただいていることには変わりはありません。銘木屋という職種は日本特有です。日本には「もったいない」という始末の精神があり、一本の杉からきれいな杉板を取るだけでなく、皮は杉皮張りに、端の白木はお箸に、端材は薪にと、余さず木を生かします。それが日本人の木とのつき合い方です。木取り一つで木味は変わります。数寄屋の名工で恩師の故・木下孝一棟梁は、よくそれを「五感で感じろ」と言われました。まず年輪と木目を見ろ、次に匂いを嗅げ、製材するときの挽く音を聴き、手で木肌に触れて、そうして木味を知れと。

赤松 合理化・デジタル化が進むなか、そのように感じるべき「五感」が劣化しているかもしれません。仏教の根本は「人間とは何か」という基本的な問いで、仏教ではよく「いただいた命」という言い方をします。今後は、そういうことをもう一度真剣に考えることが大切な時代になっているのではないのでしょうか。

中川 木の仕事をしていると、ときに人知を超えた大きな流れを肌で感じる瞬間があります。今は成果主義の世ですが、木はどれだけ手塩にかけて育てても大雪で折れたり鹿や熊に傷つけられることがあります。自然の無常と偉大さ、対する人間の小ささを痛感して、謙虚にならずにはいられません。ですが、折れたら折れたなりに、そこからどう第二の人生を生かしてあげられるかと考え、手を尽くします。私達は100年生きた木には100年生きたことへの敬意をもって接します。自然への畏敬の念を持っているから。



赤松 徹眞 あかまつ てっしん（龍谷大学学長）

1949年奈良県宇陀市生まれ。

龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。（文学修士）1984年龍谷大学文学部講師、1987年龍谷大学文学部助教授、1998年龍谷大学文学部教授、2005年龍谷大学教学部長、2007年龍谷大学文学部長、2011年4月学長に就任、現在に至る。専門は日本仏教史（日本仏教の歴史的な展開、現代仏教の可能性を研究）。

木も土も文化も肌で知ってこそ

赤松 本学は今年で377年目を迎え、2015年4月には瀬田キャンパスに新しく農学部を開設しました。命を支える食と農とその循環を見つめ、持続可能な社会を切り拓く学部です。今、ライフスタイルや価値観にも変化が見え、高度成長期のように利便性や物質的充足ばかりを追求するのではなく、生活の場や自然環境に関心が移行しています。あらためて今までと違った見方、関心で「農」が積極的に選択されているのを感じます。昨年は「食の循環実習」の一環で、農学部の全学生が稲刈りを体験しました。

中川 海外の大学生に比べて、日本の学生はリアルアクションが少ないようです。例えばお米をつくるときに、農学部のその実習のように、機械に頼らず苗から自分で手で植えて稲刈りまでする。そういう大事な経験が今の学生には少ないことを寂しく思っていました。農学部の学生さんはいい体験をされていますね。現在、われわれ職人はきわめて危機的状況に陥っています。そんな今、経営、経済、とくに農学などを学んだ人が、総合的な視野をもって来てくれることにとても期待しています。「林業女子」も増えましたしね。

赤松 京都は多様な伝統や文化財が豊かな町です。寺社、伝統建築、茶道・華道、美術館、博物館。龍谷大学ではこの4月に、文学部歴史学科に文化遺産学専攻を開設しましたが、せっかく京都で数年を学ぶ以上、学内外にあふれる素晴らしい文化に触れる機会を提供したいものです。

中川 学生さんにはぜひ文化や伝統を肌で

知ってほしいですね。この町家キャンパスも素晴らしい学び舎です。この床の間を見るだけで、大店の織間屋さんだったことがわかります。日本の建築は全てに意味があり、お使いの木の種類一つにも施主の人の柄や人生、物語が感じられます。龍谷大学の学生さんには、そういった一事一物の「奥」を考える見方にも関心をもっていただけると嬉しく思います。他のキャンパスもそれぞれに個性があり、多様な教育環境の豊かな空間性のなかで、五感の磨かれる体験を重ねてくださることを願っています。

赤松 グローバル時代の今、京都での豊かな経験を提供することも大学の使命です。いわば文化のハブ拠点として、真にグローバルな人材をしっかりと育て送り出していきたいところです。

中川 京都は昔から、全国各地の優れたものの「とりあわせ」に長けていました。銘木屋がとくに発展したのは高瀬川舟運による流通の活発化した江戸期、とくに幕末です。私どもの酢屋では、6代目酢屋嘉兵衛のときに坂本龍馬が投宿していますが、当時土佐材の御用達をしていた酢屋に「龍馬は、木とともにやってきた」と祖父から伝え聞いています。こうして集まる全国の材を見立てて、「出合いの妙」をつくるのが京都。各地の特産を職人によって昇華し、それをまた各地に届けていく。伝統の技や文化の知識に想像力を添えて新しいものを生み出していく。温故知新をリアルに経験したり、体感して、新しきものを築く素養にして据えほしいですね。

赤松 時代の移り変わりを本質的に見据えて、しかし社会の動きに柔軟かつ智慧をもって主体的に向き合い、自ら志をもって取り組んでいける人を育てる。そんな大学でありたいものです。

第5次長期計画前半期事業における成果

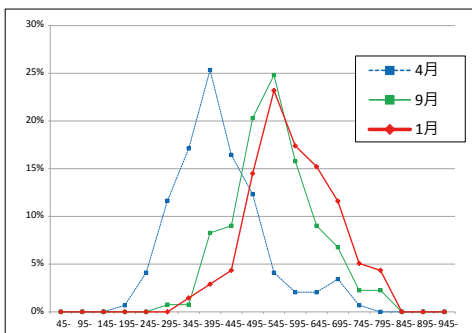
(1) 国際学部グローバルスタディーズ学科全員の平均が610点を突破

2015年4月に開設した国際学部グローバルスタディーズ学科は、卒業要件としてTOIEC730点レベルのスコアが必須となる。1年次(前期・後期)には、15人程度の少人数クラスで週8～10回(週12～15時間/年間360～450時間)の徹底した英語運用能力を高める教育をおこなっている。

教員の熱心な指導のもと、学生たちは授業やキャンパス内での自主学習にて語学力を上げる努力をしており、その結果、TOEICスコアの平均が610点を突破するなど、着実に学習の成果が現れてきている。

4月1日の入学時点と2016年1月までに提出のあったTOEICスコア結果と比較し、平均で174点上昇。

TOEICスコア(平均)	2015年4月	438点
	2015年9月	570点
	2016年1月	612点



龍谷大学国際学部グローバルスタディーズ学科2015年度入学生TOEICスコア分布

(2) 深草図書館の利用者数が50万人を突破

深草キャンパス和顔館の竣工に伴い、2015年4月から新たに開館した深草図書館の利用者数が、2016年1月に50万人を突破した。第5次長期計画の中で、大学教学施設の充実を目的としたキャンパス整備の一環であり、多様な学びの空間としてナレッジcommonsも設けられている。ナレッジcommonsでは、大学院生のチューターによる学習支援として、レポートの書き方やレジュメの作成の仕方などのライティング支援を提供している。また、図書の利用促進として、新入生支援や就職活動支援などの学生生活に合わせたテーマでの展示や、教員からの推薦図書の紹介、学生サポーターによるビブリオバトルの運営・開催など、学生と教職員

が協働しながら展開を続けてきた。全国の大学図書館の利用が横ばいまたは減少傾向が見られる中、これらの取り組みの成果として、毎月の利用者数は前年度比約1.5倍、貸出冊数は前年度比1.2倍で推移し、学生の主体的な学びに繋がっている。



03 | Ryukoku Event

龍谷大学シンポジウム

「日本料理の国境線」

龍谷大学は、2015年4月に「食の嗜好研究センター」を設置し、「日本料理研究班」と「食品開発における食嗜好研究班」が食の嗜好性に関する研究を進めてきた。シンポジウムでは、同センターに所属する研究員それぞれの研究成果を発表したほか、客員研究員がプレゼンテーションで紹介する料理の試食会がおこなわれた。

日時：2016年2月11日(木・祝)

会場：ANAクラウンプラザホテル京都

第1部 研究者 VS. 料理人

- ・川崎 寛也(味の素(株)) VS 才木 充(直心房さいき)
- ・山崎 英恵(龍谷大学農学部准教授) VS 高橋 拓児(木乃婦)

第2部 プレゼンテーション「国境線はどこにあるのか？」

栗栖 正博(たん熊北店)、佐竹 洋治(竹茂楼)、下口 英樹(平等院表参道竹林)、宗川 裕志(大和学園日本料理学科長)、高橋 義弘(瓢亭)、中村 元計(相伝 京の味 なかむら)、村田 吉弘(菊乃井)、吉田 修久(修伯)※五十音順
対談「超えるべきか、超えないべきか」

村田 吉弘(菊乃井)、伏木 亨(龍谷大学農学部教授)



国際シンポジウム

京都アライアンスとレジリエントな都市圏

龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC)は、経済協力開発機構(OECD)と共同でシンポジウムを主催した。京都アライアンスによる地域公共人材の育成を通して、レジリエントな都市圏の実現をめざす取り組みについて、国際的に発信した。

日時：2015年10月1日(木)

場所：龍谷大学深草キャンパス 和顔館B201

スピーカー：Rolf Alter(OECD 公共ガバナンス・地域開発局長)、白石 克孝(龍谷大学 LORC センター長)、福井 照(衆議院議員)、山内 修一(京都府副知事)、中山 泰(京丹後市長)、Terry Schwarz(ケント州立大学クリーブランド・アーバン・デザイン・コラボレーティブ所長)、Roman Szul(ワルシャワ大学教授)ほか



04 | People, Unlimited

凜とした芸に憧れ 百万石金沢の 文化継承の職を選ぶ

石井 愛美さん

文学部4年生

金沢3茶屋街の一つ、浅野川沿いの狭い路地に格子と石畳の情緒ある風情の主計町。そこのお茶屋「まゆ月」に昨年秋、新たな芸妓が誕生した。芸名「凜」こと、今春本学を卒業する石井愛美さんだ。その名のとおり、愛らしいなかにも芯の強さを感じさせる女性である。

高校生まで金沢で過ごし、大学から京都へ来た石井さん。ごく普通的女子大生だった彼女が、非日常の世界へ足を踏み入れることになったのは、京都先斗町のお茶屋でのアルバイトだ。そこで自分と年の変わらない舞妓さん達の姿に心を打たれたという。「大人の社交場でお客様をしっかりとおもてなしして、裏では

一生懸命に芸を磨く彼女らに比べ、私は目的もなく漫然と毎日を過ごしているだけでした。なんて違うんだらう、とショックでしたね」

3年生になり、一般企業への就職活動をしたもののピンとこなかった。そんな時、金沢で芸妓を募集していることを知り、問い合わせしてみたところ紹介されたのが「まゆ月」だった。

「私は、哲学科でドイツの社会心理学者、エーリッヒ・フロムについて研究していました。彼の思想は“人は孤独に立ち向かい、人生を能動的に切り拓かなくてはならない”というもの。この考え方は、他の友人達とは違う進路を決断する私を後押ししてくれました。でも、本



当にこれで良いのか、と悩んだのも事実です。芸妓は伝統文化を継ぐ立派な職業だと思うのですが、偏見を持つ方もいる。それがずっと心のどこかで引っかかっていました。でも、迷う私に母親が“あなたにしかできないことがある。自信を持ってやりなさい”と言ってくれて、心が決まりました。また、県や市も伝統文化の継承と発展に力を入れていて、いろんな支援があります。年金制度も整っているんですよ」

石井さんは、昨年の夏休みから金沢にマンションを借りて、三味線、鼓、日本舞踊などの稽古に励んでいる。どの芸事も初心者ながら懸命に練習を重ね、11月のお披露目の日には

『金沢風雅』を先輩の芸妓さん達とともに踊りきったという。それからも毎日のように作法の修業が続いている。

「毎日が未知の世界。お座敷ではお客様との会話からも学ぶことが多い。この仕事に誇りを持って、芸事に打ち込んでいきたいです」



石井 愛美さん

04 | People, Unlimited

“はんだ”でアート コンテスト2年連続優勝

山本 滉平さん

理工学部3年生

2014年度「第2回はんだ付けアートコンテスト」で第1位に選ばれた山本滉平さん。第1回に続いての優勝だ。はんだ付けとは、融点の低い鉛と錫の合金（はんだ）をコテで溶かし、プリント基板と電子部品を接着する作業のことである。その発祥は紀元前まで溯り、現代でも電機・電子機器製造業など最先端の分野においても欠かせない技術だ。機械化が進んではいるものの、熟練の職人の手による作業が必要となる場面も多いという。

今回受賞した山本さんの作品はドラゴン。10センチほどの小さなオブジェだが、通常1回に溶かすはんだが1ミリにも及ばないことを考

えれば、大作だ。製作期間は約2カ月、一日5〜6時間も作業に没頭した日もあったという。

「こだわったのは、表面の荒々しいテクスチャー。はんだは成分に松脂が入っているため、表面がつるつと丸くなるものですが、試行錯誤の末、松脂が蒸発するまで熱を加えれば、表面を尖らせることができることを発見しました。また羽根の表現も工夫しています。本来はんだは点で接着するもので、面を構成するのは難しい。そこで、はんだ吸い取り線という、一度接着したはんだを取り除く道具を用いることで実現しました。これには“その発想はなかった”と驚かれましたね。プロなら絶対やらない



無謀な技術ばかりですが、経験を重ねるうちに、はんだの特性をよく理解できました」

山本さんがこのコンテストへ参加したきっかけは、企業へのインターンシップをおこなう Skill UP Communication というサークル活動での一環で、派遣先の企業でプリント基板のはんだ付けなどを手伝っていたときに、コンテストに出てみては、と声をかけられたという。

「なかなか思いどおりにいかず手こずりましたが、自分で考えながら問題を解決していくのが面白かったです。将来は設計や開発に携わりたいと思っていますが、はんだはものづくりの基本。その技術について深く知ったことは、

今後ものづくりに関わっていく上できっと役立つと思います」

試行錯誤しながら自分で答えを見つけ出す。そんな姿勢は研究や仕事にもつながるもの。既存の概念に捕われない発想を持った山本さんのような若者が増えれば、日本のものづくりもまだまだ期待できる。



山本 滉平さん

04 | People, Unlimited

「たのくるしく走る」 めざすは世界 Le Tour de France

柴田 雅之さん

理工学部3年生

2015年11月サイクルロードレース「Audi presents 益田チャレンジャーズステージ(U23クラス)」で見事優勝した柴田雅之さん。71kmの距離を実業団も含む41人の若手選手が競い合い、登り坂を制した柴田さんはラスト2周を独走してフィニッシュ。このタイトルで2016年全国日本選手権の出場権も手に入れた。

「自然な環境にいるのが好きだから」が、自転車を好きになったきっかけだ。幼少の頃から周りの景色をよく観察する子どもで、そんな場所に自分一人で行くことを可能してくれたのが自転車だった。

中学2年生の時に買ってもらったクロスバイ

クがきっかけで、自転車への興味は趣味から競技へ変化していった。その自転車で高校へ毎日通学。13kmの道のりは、柴田さんにとって楽しいサイクリングの時間だった。風、匂い、気温、景色、スピード感…、自転車の魅力はこれらを肌で感じられることだ。

そして大学に入り自転車部レース班へ入部。龍大の自転車部には監督はいない。自分で練習スケジュールを考え、取り組む。自ら負荷をかけ一つひとつクリアしていかなければいけない。そこで見つけた練習のコツは「たのくるしく走る」こと。「繰り返して憂鬱になる苦しい練習も、工夫次第で楽しくできるはず。だから、



photo by cyclo wired@S.Kato

たのくるしく。これを常に意識して、練習に取り組んでいます」

自転車を通して成長したことは、「やりたいことを素直に言えるようになったこと」。学外の合宿にも一人で参加するなど、自分の意志を表現し、積極的に行動に移す柴田さんに、親身にアドバイスをくれる他大学の監督もいる。

何よりも転機になったのが、農学部の石原健吾先生との出会いだ。自転車好きという石原先生から、最新測定設備が揃うヒト代謝実験室を使わせてもらえることになり、トレーニング環境が一変した。室内での負荷の高い練習、体組成の分析、補給食の選定など、科学

的なアプローチが可能となったことが今回の優勝につながった。

今後プロの道へ進む夢も、本場欧州への憧れも密かに秘めている柴田さん。2016年6月のプロへの登竜門、全日本選手権でも笑顔のガッツポーズが見られるのか。



石原健吾先生 柴田 雅之さん

「個」だけでなく「群」を見て 農業の可能性を探る

農学部 資源生物科学科

大門 弘幸 教授

学術的知見が土の体験を「農学」にする

農学部ができて1年。意欲あふれる1期生400名は、この1年、何をどんなふう吸収してきたのか。新学部初年度の学びの現場を大門弘幸教授に聞いた。

作物学を専門とする大門教授が担当する授業の一つに「植物栽培の考え方」がある。農学は、広く自然科学から社会科学におよぶ学際的で複合的な学問だ。そのなかで、植物の価値を農学的特性から評価し、栽培技術そのものの考え方や技術の背景にある学術的基盤について知るのがこの授業だ。「高い関心と志をもって入学してきた新入生が、1年目の前期から専門科目に入っていけるのは本学農学部の魅力の一つ」。とはいえ、様々な学生がいる。土にも不慣れな都会育ちの18歳から、家業などで農業経験のある学生まで。どんな状況の学生にも新鮮で有意義な学びが得られるよう、個々の授業はもちろん、カリ

キュラム自体に工夫がある。

なかでもユニークな科目が「食の循環実習」と「食と農の倫理」だ。ともに農学部全員必修。1年日後期の「食の循環実習I」では、農作物の栽培にはじまり、収穫、加工、流通にいたる全サイクルを、実際に経験しながら学ぶ。土壌のメカニズムから、イネ、ムギ、ダイズなどの栽培法、実際の作付け、除草、収穫にとどまらず、食品加工や試食会、地域の農業生産者や市場関係者との論議まで。4学科混成の6人チームで意見を交わしながら進め、13人の教員がタッグを組んで指導にあたった。近年、農林水産省などが6次産業化の推進に意欲的だが、「農学・農業にとって、やはり生産現場は大事です」と大門教授。同時に「農学部の実習として、学術的な知見と体験の相互連関が不可欠」とも。品種改良からフードビジネスまで。遺伝子から生態系まで。多様な出会いと経験を通して、複雑な課題にひるまず向き合う学識と勇気が磨かれていく。



Feature
Article

People
Unlimited

Education
Unlimited

World
Unlimited

People
Unlimited 藤谷人

News &
Topics



農の現場で、答えのない問いに向き合う

現実の社会は、答えのわからない問題だらけだ。「農学はとくにそう。時代や価値観によって、また環境や政策や生活文化の変化によって、状況は大きく急変します。何が正解かなんて誰にもわかりません」。遺伝子工学、生理学、生態学から社会学、経営・経済学、倫理・哲学まで広い分野にまたがるうえ、時代の影響ももろに受ける。学生には、自分で考える力をつけてほしい。感情や印象に左右されるのではなく、古今東西の知に学び科学的に判断する、本当の「考える力」をだ。

仏教思想と農学研究の架橋をはかる授業

「食と農の倫理」は、その一助になりえないか。この授業は前期に教員8人によるオムニバス形式でおこなった。「今年度、私が担当したテーマは環境問題と農業です。まず私が農学的見地から考えを述べました。農業が“業”として成立・持続するためには、ある程度の競争原理が必要だと私は考えていますので、そのように話しました。次の週には仏教思想の先生が登場し、仏教的視点から「勝つことが全てではない」というような話をされるわけです」。観点のちがう二つの見解。学生は戸惑う。3週目のディスカッションでは、様々な意見が飛び交った。一つの結論には到底いたらない。「それでいいのです。実際にも社会は、



大門 弘幸・だいもんひろゆき

1956年東京都生まれ。大阪府立大学大学院農学研究科園芸農学専攻博士後期課程単位取得。大阪府立大学を経て2015年4月より現職。研究・教育・現場の運動を大切にし、東近江、京都、沖縄の宮古島などを定期訪問。超大粒落花生や良質な大納言小豆など、付加価値の高い種の普及にも熱心。学生から生産者、消費者まで、広く人材教育を見据えている。2005年第51回日本作物学学会賞受賞。著書に『作物学概論』（編著、朝倉書店、2008年）など。

ブラジル南部のパラナ州で、コムギの不耕起栽培について圃場を視察



とくに農業の現場はそうなのですから」

大門教授は、マメ科植物と緑肥を長年研究してきた。マメ科植物だけが根粒菌と共生できることに着目したのだ。科学技術が進んで、化学肥料が生まれ、人類の食糧生産力は飛躍的に上がった。「けれど地球も資源も限界です。個ではなく群を見て、次の可能性を探らないと」。農学における基礎学問の重要性和貢献への敬意は尽きない。輪作や混作による低投入型の作物生産を実装し、文明が直面する難問に技術で応えたい。だからこそ、これからの人材となる学生には「現場力を鍛え、人間力を磨き、行動力をつけて、知識と技術で現場を動かす人になってほしい」と願う。

地域活性化には 文化財のもつ力が 必要だ

文学部 歴史学科 仏教史学専攻

浦西 勉 教授

(文学部歴史学科文化遺産学専攻所属予定)

※2016年4月開設

文化遺産によって歴史を学ぶこと

— 祭りや仏教儀礼、道具、衣装が庶民の生活史を物語る —

従来の歴史学は、文献資料を中心とした歴史学である。歴史を語るには文字資料が重要であるが、そればかりではない。遺物や祭具や衣装、あるいは書きつけ、記録、絵画といった「モノ」はもちろん、生活習慣、祭り、伝承などの「コト」もまた歴史の証人だ。そこからは、文字で残りにくい分野である女性史や、子ども、老人、民俗、風俗といった庶民の生活史、また地域・地方史の実態がいきいきと浮かび上がってくる。

2016年4月に新設される文化遺産学専攻では、そうした有形・無形の史資料から歴史を読み解き、これまで把握されていなかった多彩で多様な新側面に光を当てていく。ロマンはあるが、学問である以上、科学的な裏づけが重要だ。たしかな証拠に基き、論理的に、実証的に、系統立てて論じてこそ学問。モノ・コトと文献資料を包括的に捉える大胆かつ

慎重な姿勢が必要となる。

文学部歴史学科の浦西勉教授は、30年以上にわたりこうした歴史民俗学に携わってきた。「祭りや行事をはじめ、暮らしのなかのモノ・コトは、時代に応じて変化します。ですが、根源的なものは失われません」。歴史民俗学は、人々の営みに「根源的なもの」を探る方法とも言えるのだ。そこには、衣食住、労働から移動まで、記号化の力、娯楽から時間感覚、暦、人生の通過儀礼、信仰まで、人間・生活・社会の全体を把握する力が求められる。

このような深い探究の学びは、自分の常識や価値観を離れて目の前の事実から、その背景となる世界観を見抜く洞察力を鍛えさせる。文化遺産学専攻では、そのための知の方法を、理論と実践の両輪で体得する。1年生から古典籍を現物で読んで龍谷大学図書館が所有する文化財を学び、京都・奈良・宇治などの地域社会でのフィールドワークを経験し、基礎資料の調査を実地で学んでいくのだ。



Feature
Article

People
Unlimited

Education
Unlimited

World
Unlimited

People
Unlimited 誰々人

News &
Topics

大和郡山市 光慶寺 調査風景



博物館実習・展示会 「十二月展」の伝統と創発

「博物館実習・展示会 十二月展」は、そうした研究成果を「語る力」に変えて、社会に問うていく総仕上げのチャレンジだ。開催テーマの決定から、史資料の調査・収集、借用・返却まで、また、実際の展示作業やキャプション作成、図録の編集・発行、会期中の接客対応まで、企画運営の一切を学生が主体となっておこない、今年36回目を迎えた。

今回のテーマは「時季ときをかける菓子みやこ—京に伝わる歴史と四季」。履修者の「共同作業の卒業論文」だ。浦西教授がこの授業を担

当して6年になるが、「チームで有機的に動けるようになるまでが大変なのは毎年のことです。はじめの1～2カ月はすったもんだ。それが夏休みを含む2カ月ほどの調査を経て大きく変わります」と成長を語る。今年の調査では和菓子店や研究機関など25カ所を訪問した。外の世界に接して社会性が養われることでチーム力が高まり、創発が生まれるのだという。展示は社会との接点。この学習体験は学生をひと回りもふた回りも大きくする。

「それだけのことができるのは3年間の学びで基礎力がついているから」と浦西教授。知識や技術もだが、頼もしいのは「考える力」なのだという。「龍谷大学での学びは、自分で



十二月展の展示指導をおこなう浦西教授



浦西 勉 うらにし ともむ
1950年奈良県生まれ。龍谷大学文学部大学院修士課程満期退学。奈良県立民俗博物館主任学芸員、奈良県教育委員会文化財保護課課長補佐（民俗文化財担当）を経て龍谷大学に着任。吉野から奈良盆地まで奈良県内800村落を踏査するなど、30年の豊富な現場経験をもつ。

考えさせることが多い」。4年生ともなれば、困難な問いでも、「考えてみよう」と受け止める力が身に備わっている。それがここにきて花開く。

「文化によって地域活性化ができるということを知り、力強く体現していってほしい」。そうすることによって、過去の遺物が現代に宿る。

日本各地で地域・地方の特徴を活かした取り組みがさかんだが、土地の歴史の読み直しはその基盤となるべきもの。文化遺産の声を聞き、地域資源の意味を物語る人になってほしい。それは本専攻の人財育成目標にとどまらず、古都・京都、ひいては日本の今後に広く望みたい将来でもある。

05 | Education, Unlimited

健康促進を焦点に 社会コミュニティを考える 「健康なまちづくりプロジェクト」

社会学部
コミュニティマネジメント学科
井上 辰樹 教授

社会へ体と心の健康の面からサポートする

体育学の専門で、スポーツ全般のラストスパート時における様々なデータの分析、解明などを研究してきた井上辰樹教授。

一見、社会学とは関係の薄い専門分野と思えるが、人が抱えている健康問題にアプローチし、運動データの分析、結果をフィードバックする手法は、社会学の教育場面でも活かすことができる。2002年から運動指導の立場から、地域の活動や保健事業に関わるようになった。また戦後に短期間だけ実施された「ラジオ体操第3」を、古い資料から復活させ、マスコミなどからも注目を集めている。運動強度が高く抑うつ状態改善効果もあることが立証され「幻のラジオ体操」として話題性も高い。

そんな井上教授から今の社会を見た場合、課題になるのが健康、医療、疾病問題だ。なかでも生活習慣病に焦点をあてれば、個々がどのような生活をしているかで、その地域の

環境は変わってくる。そこで介護予防の観点から、滋賀県のなかでも介護負担費がトップだった守山市を拠点に、「健康なまちづくりプロジェクト」としてストックウォーキング教室を開催することになった。

参加者は年配の方が多く、「はじめは声をかけられて仕方なく参加したようでしたが、教室が終わる頃には『学生と交流することで元気をもらえる』とおっしゃるんです」。始まりと終わりに体力測定を学生とおこないデータを採取、集計、分析する。参加者はデータ提供なども受けられるが、歩くことで得られる数値的な効果よりも、学生と一緒に活動することで、心が若返るような感覚を得られることが一番の楽しみとなったようだ。この活動は、将来的な社会保障費用削減が見込める行政側、健康を心と体から底上げできる参加者側、地域の人々との交流のなかで学ぶ学生と新しい知見を拡散できる大学側、その全てが三方良しの関係を築くことができている。



Feature
Article

People
Unlimited

Education
Unlimited

World
Unlimited

People
Unlimited 誰か人

News &
Topics



机上で考えるよりも、まず外へ出る

「生きる力」とは何か。講義一辺倒の教育システムを脱し、現場主義を掲げる社会学部。自分で問題を見つけ、解決していける「強い人材」を育む。社会の出来事なら何でも研究テーマにする。講義で得た知識やスキルは、机上の空論として頭のなかで完結してしまい、アクションが起りにくい。学生達が自ら地域社会に飛び込む機会を設け、学外の人々との交流を通して知識やスキルを追究する。この現場主義をベースに、各教員が地域との関わりをなかで持つプロジェクトに、学生が参加していくのがコミュニティマネジメント実習だ。

「スポーツ社会学的な観点から見れば、日本はスポーツ文化が未熟だと言われてます。運動は教育機関などが管理し、教える立場と教えられる立場の上下関係の土壌が根付いて、自発的な運動習慣を持つことが難しい。運動への動機を保つためには、定期的な刺激を与える必要があります。一般の人が運動する場の提供として、刺激をつくる仕組みを提供するのも、大学の役割ではないでしょうか。この健康なまちづくりプロジェクトが、その走りになればと考えています」と井上教授。

実習を通して学生達は異なる世代の参加者達から学内では得られない知識を多く吸収する。しかし評価する立場から、その効果



ストックウオーキング教室の準備体操にラジオ体操第3を取り入れる



井上辰樹・いのうえ たつき

1964年広島県生まれ。日本体育大学大学院
体育学研究科。体育学修士。博士(医学)。専門分
野は公衆衛生学、運動生理学。スポーツ全体のラ
ストスタート時における様々なデータの分析、解
明を専門に研究。その後、骨粗鬆症についての研究
のなかで、地域住民のデータ採集などをおこなう
ところから地域に関わりを持つ。2000年より
龍谷大学へ。自治体と協力し、運動習慣を定着さ
せるための運動指導プロジェクトなどに取り組む。
地域社会を体と心の健康の面からサポートする
活動をおこなっている。ストックウオーキング協会
理事、ラジオ体操第3復元。

を測ることは難しい。教育の効果はいつどの
タイミングで現れるかわからないからだ。在学
中ではなく、社会に出てから、実習の経験が
役に立っていると話す卒業生も多い。

「これからは、時代とともに仕事の内容は、
ますます変化していきます。現在ある仕事が
将来に存在しているとは限りません。新たに
生まれてくる仕事に順応していくには、自ら問
題を発見し、解決することができるバランスの
とれた人材が必要です。実体験から身につ
けた知識やスキルで、社会や地域に貢献でき
る学生が、コミュニティリーダーとして活躍で
きるはず。そのような人材をコミュニティマネジ
メント学科から輩出できればと思っています」

06 | World, Unlimited

海を越えたフィールドワーク
東アジア環境政策の
希望を探りたい

政策学部

南京PBL(Project Based Learning)



徐州市・灌安湖周辺の水田で、水生生物を調査する谷垣岳人講師



日中両国で地域に根ざした実地調査

自然環境も大事にしたいし、地域の発展も望みたい。一見、二者択一とも思える現代のジレンマだ。そこに新たな価値観を見出し、どちらも叶える第三の道を探るチャレンジが、政策学部でおこなわれている。その一つが、谷垣岳人講師と金紅実准教授による通年科目「政策実践・探究演習（海外）」である。通称を南京PBL（Project Based Learning）という。

政策学部では、5年前の学部開設以来、国内各地でフィールドワークを重ね、政策実践・探究型の演習を展開してきた。そこで培った経験や手法を海外とも共有し、東アジアの環境問題に取り組んでいこうと、環境経済学が専門で中国出身の金先生と生態学の谷垣先生がタッグを組み、社会科学と自然科学を融合する分野横断型の実践プロジェクトを立ち上げた。2014年に産声を上げ、2015年に早くも単位科目化したのは、両先生の熱意と学生らの奮闘のたまものだ。

「このプロジェクトの特色は、実践のなかで課題探究をおこなうことに加え、相互訪問型の国際交流プログラムを軸としているところ」と金先生。龍谷大学の学生と中国・南京大学金陵学院の学生が共同でフィールドワークをおこなう。調査地域は、日本の京丹後市大宮町と、中国の南京市および徐州市・瀋安湖。日中で互いの国を相互訪問し、共通のテーマで実地調査や聞き取り・リサーチをおこなう。どちらにとってもカルチャーショックは大きい。その驚きを共有することが、互いの価値観を揺さぶる得難い経験になっている。

里山の活動でも知られる谷垣先生は「里山や農耕地などの自然環境を地域のリソース（資源）ととらえ、どう利活用すれば、経済的にも社会的にも環境的にも持続的に共存・共生していけるのかを探る取り組み。異なる地域を重ねることで見えてくる本質や各地域の特色を希望につなげたい」と語る。

Feature
Article

People
Unlimited

Education
Unlimited

World
Unlimited

People
Unlimited

News &
Topics



現実社会のジレンマに向き合って

2015年度の中国・南京PBL調査では、9月5日から15日の日程で14名の龍大生が南京市・徐州市を訪れ、南京大学金陵学院の学生との混合で3班に分かれて調査した。生物多様性班は、徐州市・瀋安湖で水生生物をタモ網で採取するなど生き物調査を実施。経済循環調査班は、現地調査とインタビューを通して徐州市の経済発展の変遷を学び、主体性形成要因調査班は、行政と住民それぞれの意識や取り組みを聞き取り、日本と中国の地方政策の違いを知った。

どの班も、それぞれの“相手”とじかに向き

合うなかで、理想や机上論だけでは太刀打ちできない現場の難しさも痛感した。ある参加学生は語る。「現地の人と話したり、中国の学生と議論するなかで、自分の“当たり前”が全然当たり前じゃないと知って、頭をガツンと打たれたようでした」。この現実をどう考えたらいいのか。戸惑いは日本での調査でもあった。「“地産地消”の概念一つとっても、見方一つで意味も価値も真逆になってしまう」。利潤最大化を求める経済至上主義が自然を置き去りにしてきた問題構造は、ほぼ世界共通と言っていい。違うのは、経済発展段階だ。日本などの“先進国”は、環境問題の先進国でもある。ならば次は日本が解決策の先行モデ



中国・南京大学金陵学院の学生と共同で、フィールドワークをおこなう金紅実准教授（写真中央）

ルとなって、環境と経済が共存できる第三の道を東アジアに示せれば、未来に光が見えるのでは。

「経済、環境、憲法、地域、世界といった多様な視点から社会全体を捉えることで、見えてくるものがあるはず」。政策学部の学際的な学びに期待をかけるのは、多文化共生を学ぶなかでチーム研究とフィールドワークの意義にめざめ、この授業に参加した学生だ。谷垣・金両先生も「ともいき」を理念とする本学にふさわしい「グローバル」な調査・研究。毎年の成果を国境や学年を超えた共有知とし、継続的・段階的に探究を深めていきたい」と語る。Think globally, act locally（地球規

模で考え、足元から行動する）。片手に望遠鏡、片手に虫眼鏡を持って将来の一手を模索する果敢な取り組みは、始まったばかりだ。



金紅実准教授（左より二人目）、谷垣岳人講師（右より二人目）とプロジェクトに参加した学生達

07

Event
Ryukoku Museum

水に宿る神仏、その神秘に触れる



重文 春日龍珠箱 外箱:奈良国立博物館 蔵

国宝 扇面法華経冊子 観普賢經:大阪 四天王寺 蔵

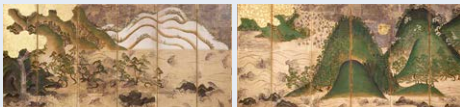
龍谷ミュージアム 2016年度 春季特別展

『水 神秘のかたち』

2016年4月9日(土)~5月29日(日)

主催:龍谷ミュージアム、朝日新聞社

※本展はサントリー美術館からの巡回展です



重文 日月山水図屏風:大阪 金剛寺 蔵

七福神の紅一点といえば弁才(財)天。あなたは、琵琶の代わりに武器を持ち、『宇賀神(顔は老翁、胴体はとぐろを巻いた蛇という異形の神様)]を頭に乘せている弁才天をご存じだろうか。もともと古代インドのサラスヴァティー

河を神格化したヒンドゥー教の女神。日本にやってきて、今でこそ学問や芸術の神として親しまれている弁才天は、その前段階として、日本各地の水の聖地にその土地固有の弁天様として祀られ、土着的な信仰色の強い性格を帯びていたという。恵みをもたらし、命を育んでくれる水は、時に強大な力で、我々を圧倒する存在だ。『水 神秘のかたち』展では、人々が水を信仰の対象としてとらえ、様々な切り口で表現してきた手法や作品を、全6章にわたって紹介する。

2週間限定で公開される重要文化財『日月山水図屏風』は、月と太陽、四季が屏風に織り



宇賀神像：大阪 本山寺 蔵

弁才天坐像：滋賀 MIHO MUSEUM 蔵

重文 春日龍珠箱 内箱：奈良国立博物館 蔵

生まれ、あらわされている世界観は“宇宙”。この屏風は、密教の灌頂儀式（受戒する際や修行者が一定の地位に上がる時に頭に水を注がれる儀式）の際に飾られたと考えられている。

今回の展示品は、水を使用した儀礼や、雨乞い儀式に実際に使われていたと伝えられている作例が数多い。なかでもロマンをかきたてるのは、『春日龍珠箱』など宝珠（龍が持つ玉、いわゆるドラゴンボール）に関わるものだ。二重の箱に描かれるのは、宝珠を守る八大龍王。箱の内蓋に人間の姿と本来の姿の2パターンで鮮やかに描かれている。

展示品のなかで唯一の国宝は、『扇面法華

経冊子』。平安時代の作品で、下絵には泉に接した建物のなかで貴族の男女が添臥し、睦み合う妖艶な情景が描かれている。

「今回の展示を通して、毎日接している水が、実は神秘的で重層的な信仰世界と深いつながりがあることに気づき、楽しんでいただければ嬉しいです」。(学芸員：村松加奈子)



村松 加奈子
龍谷ミュージアム
学芸員

第13回

青春俳句大賞

「龍谷大学青春俳句大賞」は、世界最短の詩形文学である「俳句」を通じて、現代に生きる若者が感じたこと、思ったことを自由に表現し、社会に発表するための場を提供することを目的として2003年度から開催しており、今年度で13回目を迎えました。

今回は88,586句の応募があり、多くの力作が寄せられるなか、厳正なる選考をおこなった結果、見事に最優秀賞入賞を果たした作品をここに発表します。

中学生部門 最優秀賞

長崎の夾竹桃は白ばかり

滋賀県 阿部雅也 さん 彦根市立東中学校3年

評・有馬朗人

夾竹桃の花の色は、紅、淡紅、白、黄と様々あり、紅色のものが多い。長崎は鎖国時代に唯一の外国貿易港として栄えた。その異国的雰囲気「夾竹桃は白ばかり」により佳く描かれている。

高校生部門 最優秀賞

鷹渡る大事なことは復唱す

東京都 高田優香 さん 私立学習院女子高等学校1年

評・大石悦子

「復唱」とは文字どおり、繰り返かえし唱えることですが、伝えられたことで、記憶に残しておかないといけない大事なことを、私達は口頭による復唱によって確認します。「鷹渡る」は、鷹が越冬のために北方からわが国に渡って来ること。他の多くの鳥達にくらべて、その存在には威厳と貫禄があります。しかし、それだから鷹の渡りが復唱するに値するのだとすると、句柄は小さくなつてしまいます。

この句の良さは、「鷹渡る」と「大事なことは復唱す」というフレーズが、作者のなかでよく融合しているところにあるのだと思います。

かなづかひひつかかりつつ歌留多読む

新潟県 野口 沙紀さん 新潟リハビリテーションシオン大学4年

評・大峯 あきら

若者にも歌留多の名人はいるが、これは仮名文字が苦手になった近頃の学生が、ところどころ間違えたりして読んでいるところの歌留多遊びの雰囲気を感じている。

帰郷してすぐに祭りの人となる

愛媛県 菅 伸明さん 一般

評・入澤 崇

久しぶりの故郷、家族との語らいもそつちのけで、慌ただしく祭りに参加する光景が目には浮かびます。おそらく小さい頃から、祭りの季節になると、ときめいていたのでしよう。

Summer vacation Going to my hometown without my father

兵庫県 長谷川 慧司さん
私立甲陽学院中学校1年

評・ウルフ・ステイーブン

簡単明瞭でいてしっかりと哀感が漂う。父は亡き人か、病気、離婚など避けられない事情か、大切な故郷にある喪失感。それに向かう哀しさ。言葉に表さずとも伝わる感情を表現できる句は何より力強い。

龍谷人

最高のチームで 史上初の4連覇に挑戦

日本生命保険相互会社
野球部キャプテン

岩下 知永さん

夏の都市対抗野球、秋の社会人野球日本選手権、この二つの大会が社会人野球がめざす頂点だ。2015年、日本生命野球部はその二大会で連続優勝を果たした。

その年の1月からキャプテンとしてチームを牽引し、優勝に大きく貢献した岩下知永さん。主将になってまず取り組んだのがチーム改革だ。個人の技術は高い、なのに結果が出ない。足りないのはチームの心を一つにすることだった。ランニング、キャッチボールから呼吸法まで、それまで分かれてやっていたこと全て「チーム全員でやる」と決めて実行。毎日ちがう部員に声をかけ、チームの関係性を深めた。またメンタルトレーニングの第一人者を迎えて、全員の心理面も強化した。

そして迎えた夏の都市対抗、18年ぶり4回目の優勝。続く秋の日本選手権では、9回裏の逆転サヨナラで13年ぶり3回目の優勝。「夏秋連覇」は社会人野球史上でも3チーム目。次の目標は史上初の4連覇だ。

甲子園出場常連校の大阪桐蔭高校から龍谷大学、日本生命へと進んだ野球一筋の人生。社会人4年目のアジア大会で銅メダルを獲得した直後、半月板を損傷した。けがで動けなくなったその時、岩下さんはあせらずに考え方を整理した。体幹を鍛えるために体づくりを根本的に見直した。ポジションもショートからセカンドへ。プロに憧れたこともあるが、「ミスター社会人をめざす」と思い定め、故障をむしろリスタートの機に転じた。

大好きな野球で生活ができることを、一年でも長く続けたい。やめた瞬間に、今まで経験したことがない仕事が残っている。岩下さんにとって、野球を終えるということには、大きな覚悟が必要なのだ。野球の醍醐味は「あの小さな一球をみんなで追いかけること」と目を細め、どこよりも「今のチームが最高」と胸を張る。社会人10年目、背番号1。小学校1年で野球を始めて、やめたいと思ったことは一度もない。根っからの野球少年の挑戦はこれからも続く。



Feature
Article

People
Unlimited

Education
Unlimited

World
Unlimited

People
Unlimited 龍谷人

News &
Topics

いわした ともひさ 1984年大阪府堺市生まれ。2007年国際文化学部卒。大阪桐蔭高校時代、2002年夏の甲子園に出場した。龍谷大学時代は硬式野球部で活躍、3度の全国大会を経験した。座右の銘は「和合」。親しみ合い、和を尊ぶことをいう。

龍谷人

四国のNHKに “愛されキャラクター”登場

NHK高知放送局キャスター

西村 唯さん

2015年春、晴れてNHK高知放送局のキャスターになった西村唯さん。小学生のとき、ただ一度褒められたことがある。ナイチンゲールの生涯をクラスメイトの前で発表したときだった。先生からかけられた「アナウンサーみたいに上手だったよ」という一言が、彼女の人生を決める。

西村さんは、小学生から9年間続けた陸上競技で培った根性で、試験を受け続け、狭き門のキャスター採用で内定を勝ち取った。そんな彼女の魅力は、人見知りせず、誰とでもすぐに仲良くなってしまう屈託のない人柄。そのキャラクターが、慣れない高知でも功を奏し、“いごっそう”な男性や“はちきん”な女性にも愛され、高知ライフを満喫しているようだ。

「高知は自然が豊かで近いので、休みの日には釣りをしたり、山登りをしたり。また、地元の人達とも家族ぐるみの付き合いをしていただき、採れたてのお野菜やお米を頂くことも。夏には初めてよさこい祭りにも参加しました。忙しい

けれど、スタジオにいるよりも外に出るほうが好き。毎日、新しい発見、新しい出会いがあり、高知が大好きになりました」

楽しい生活の一方、仕事は予想以上にハードだ。キャスターが働いているのはテレビに映っているときだけと思われがちだが、地方局のキャスターは、やることが山ほどある。現在西村さんは週に3回、夕方の情報番組でコーナーを担当しているが、ネタ探しからテーマの設定、構成、撮影の立ち会い、自分が読む原稿作り、ナレーション、その後の編集まで全てにかかわり合う。

就職活動のとき、諦めなくてよかった。だから今、やりたかったことができていているという西村さん。「私は有名なキャスターになるよりも、いつも好奇心の赴くままに楽しいことをしたい。いい意味でNHKっぽくない、やわらかいキャラクターでいたい。これからも自分らしさを大切に、街の人に親しまれ、愛されるアナウンサーをめざしたいです」



にしむら ゆい 1993年大阪府生まれ。2015年政策学部卒。学生時代にアルバイトをしていた、マクドナルドの全国接客コンテストで入賞。大学時代に政策学部のゼミでフィールドワークをしながら六つのコミュニティ放送局について調べた経験が、土地勘のない四国の土地で、いま役にたっている。現在は『こうち情報いちばん』に出演。

08 | People, Unlimited

龍谷人

Googleで見る 世界と日本の潮流

グーグル株式会社
マーチャンダイジングマネージャー
Google Play

三浦 正剛さん

経営学部を卒業後、米サンノゼ州立大学大学院へ進学。Apple Japan本社を経て、2012年、グーグル株式会社に入社した。現在は、デジタルコンテンツ配信サービス「Google Play」ゲーム担当のマネージャーとして、日本・東南アジア・インドを含む東アジア一帯を一手に引き受け、世界を飛び回っている。

時代の最先端を創る業界にいますが、三浦さんの道は、実は幼少時代から一貫している。小さい頃に親と見ていたハリウッド映画に心おどらせ、長じて映画配給の仕事に憧れた。研究テーマは映画配給ビジネス。龍谷大学在学中にはインターンシップ制度を利用して関西の放送会社で半年間、企画やテレビ取材などメディアの仕事を経験している。サンノゼ州立大学の大学院ではフィルムスタディーズを専攻し、卒業後はアメリカの制作会社で1年ほど働いた。変わらずエンジンとなってきたのは、人を楽しませるコンテンツ、つまりエンターテインメントへの感動とリスペクトだったのだ。

夢をカタチにする実現力と推進力は、龍谷大学で鍛えられたという。ゼミ長をつとめた国際流通論の川端基夫ゼミは「厳しいけれど自由だった」。学年をこえたプレゼン大会もあれば、ゼミ長の続投を問う信任投票もある小さな自治社会。「大切なもの」を仲間と共有しながらムーブメントに育てていくチームビルディングの経験を積んだ。他方、スキーサークルで他大学との広域連盟に参画、米南ミズーリ州立大学へ一年間の交換留学。さらに先述のインターンシップと、学外・国外にもたくましく飛び回り、世界に通用する目と手と頭を磨いた。

大学を卒業して11年。世界トップクラスのスピードと情報量と判断力を求められるなか、「好き」を学問や仕事にすることの難しさにも直面してきた。そして今、「世界を見ているからこそ、日本のコンテンツの素晴らしさがわかる」という。「実は海外にない」日本の知的資源を、どうビジネスモデルにしていけるか。三浦さんの感性は常に「まだない楽しさ」を探している。



みうら しょうご 1981年兵庫県生まれ。2004年経営学部卒。留学制度の充実に惹かれて龍谷大学に進学。海外出張も出会いも多い人生を送っているが、なかでも Apple 時代に接した故スティーブ・ジョブズ氏は「まさにカリスマ」。圧倒的なリーダーシップと世界観に強烈な刺激を受けた。仕事では常に情報収集のアンテナを広げ、次々と登場する膨大なアプリを瞬時に判断する、センスと目を磨いている。



農学部実習農場で 初めての稲刈りを実施

2015年10月、本学農学部の大津市牧の農場において、初めての稲刈りを実施した。農学部では、「食の循環」をテーマにし、生産、加工、流通の流れを体験する「食の循環実習」を低年次の必修科目としている。今回は、日本晴、滋賀羽二重籾(しがはふたえもち)の2品種を各1,000㎡にわたり刈り取りをおこなった。



バドミントン女子個人シングルは 優勝・準優勝、ダブルス第3位 男子は創部初の団体第3位入賞

2015年10月、「第66回全日本学生バドミントン選手権大会」で女子はシングルスで杉野文保さん(法学部3年)が優勝、朝岡依純さん(法学部1年)が準優勝。ダブルスで、公受美帆さん(経営学部4年)、小宮山彩さん(法学部3年)ペアが第3位入賞した。団体では昨年度に引き続き準優勝。男子は創部初となる団体で第3位を勝ち取った。



バトン・チア SPIRITS 全国選手権大会に初出場決定

2016年1月、「USA Regionals 2016 大阪大会」で大学編成 Show Cheer部門で、本学のバトン・チアSPIRITSが第2位入賞。その結果、3月に幕張メッセで開催される「USA Nationals 2016 全国選手権大会」への出場が決定した。チアチームでは、初の全国大会出場となる。またバトンチームは、12月に開催された全国大会で金賞を受賞。個人戦でも3月の全国大会の出場が決定している。



国際学部GS学科で、英語のプレゼンテーションコンテストを実施

2016年1月、国際学部グローバルスタディーズ学科(GS)で、1年生による英語のプレゼンテーションコンテストを実施した。このコンテストは、英語で自分の考えを発表する場として開催され、英語力についても、「海外経験が長くなくてもここまでできる」という、一定の評価ができるコンテストとなった。またGS生のTOIECスコアは入学以降、学科平均で174点、個人では510点上昇(2016年1月現在)するなど、学科として着実な成果を上げてきている。



ヒーローショーで子ども達に仏教の教えを伝える「ジッセンジャープロジェクト」を開催

龍谷大学大学院実践真宗学研究科の有志がおこなっている、仏教をテーマにした自作のヒーローショー「ジッセンジャープロジェクト」。様々な課題がある現代社会に、仏教の教えをどう「実践」していくのかを研究するなかで生まれたのが「ジッセンジャー」。そのヒーローを通して、子ども達を中心により多くの方に仏教を身近に感じてもらいたいと活動している。



学生版市民メディアフェス2015を開催

12月19日(土)、12月20日(日)

主催：学生版市民メディアフェス運営委員会

学生版市民メディアフェス2015を開催

2015年12月、2003年から毎年各地で続いてきた「市民メディアフェス＝市民メディア全国交流集会」を、今年初めて学生主催の「学生版市民メディアフェス2015」として、龍大生が運営し、深草キャンパスなどで開催。全国各地の市民メディアの担い手が集い、主に映像作品を中心に『社会に対して伝えたいこと』を発表、表現し、語り合う場となった。今回は、多くの社会人が応援団(寄付者)として見守り、「ヘイトスピーチ」「原発」「沖縄」などのテーマで北海道から沖縄までの延べ420人の大学生や高校生が発表、交流をした。龍大生の作品も上映され、次年度開催地のFM読谷(沖縄)にバトンを渡した。



吹奏楽部、第63回全日本吹奏楽コンクールにて金賞を受賞

2015年10月、吹奏楽部は第63回全日本吹奏楽コンクール大学の部(札幌コンサートホール Kitara)にて金賞を受賞した。関西の代表として、じつに5年ぶりの金賞の受賞となった。また、2016年2月「第42回関西アンサンブルコンテスト」に京都府代表として金管八重奏が出場し、金賞を受賞。3月におこなわれる「第39回全日本アンサンブルコンテスト」の出場も決定した。



今年も東日本大震災復興支援チャリティコンサート「吹奏楽フェスタ」を開催

2015年、吹奏楽部は、東日本大震災復興支援チャリティコンサートを、6月に徳島、8月に大阪、9月に奈良、11月に石川で開催した。各会場では地元高校の吹奏楽部も複数校参加。最後には出演者全員での合同演奏や会場全員での合唱などをおこない、会場は大いに盛り上がり、感動に包まれた。



農学部学生が収穫した糯米で収穫祭「ふるまい餅2015」を開催

2015年12月、瀬田キャンパスで、龍谷大学生生活協同組合との共催で収穫祭「ふるまい餅2015」を開催した。糯米は、農学部必修科目の「食の循環実習」で学生が収穫した「滋賀羽二重糯(しがはぶたえもち)」を使用。実習農場がある牧地区の方々には教わりながら、学生達は慣れない手つきで餅つきをおこなった。つきたての餅を、ぜんざいやみたらしにして計500食を瀬田キャンパスの学生、教職員に振る舞った。



高校生と主権者教育を実践

2016年1月、京都府立京都八幡高校で、本学の研究プロジェクト「熟慮型・表現型メソッドを活用した法教育に関する研究」と、政策学部のPBL科目(課題解決型学習)である「政策実践・探究演習」若者投票向上プロジェクトで、選挙権年齢の「18歳以上」への引き下げに伴う「模擬投票」の企画・運営をサポートした。架空の「はちまん市長選」を想定し、高校の跡地利用問題を争点に、八幡高校3年生約200名が有権者となり、龍谷大学政策学部生が扮する候補者の演説や意見交換の後、模擬投票をおこなった。



「アーバンデザイン甲子園」で政策学部阿部ゼミが最優秀賞を受賞

2015年12月、近畿圏の建築系の学部・大学院が参加する「第6回アーバンデザイン甲子園」で、政策学部・阿部大輔ゼミの学生と京都建築専門学校による合同作品『借りて嗜む都市のかたち』が最優秀賞を獲得した。このコンペは、近畿圏の大学・大学院におけるアーバンデザインや都市計画・まちづくりの演習、実践、卒業設計等を集め、教員・学生が一堂に会し、作品発表・意見交換・情報交流をおこなうものだ。今回は全21作品の応募のなかでの受賞であった。



経済学部生が「政策研究交流大会」で京都府知事賞を受賞

2015年12月、公益財団法人大学コンソーシアム京都主催の「第11回京都から発信する政策研究交流大会」で、経済学部・辻田ゼミの3年生グループ(代表:石田貴之さん)が、京都府知事賞を受賞した。同大会は、都市の抱える問題・課題を見つけ、それを解決するための研究をする大学生・大学院生の研究交流・発表の場で、2005年度から開催されている。



学生有志「アペラボ」、瀬田キャンパスで蜂蜜づくりに挑戦。

農学部や社会学部の学生有志団体「アペラボ」は、瀬田キャンパスで養蜂に取り組んでいる。今年はニホンミツバチの養蜂をおこない、約2リットルの蜂蜜の採取に成功した。今後は、セイヨウミツバチの養蜂や、採取した蜂蜜を利用したオリジナル商品の開発などをめざす。アペ(ape)はイタリア語で蜜蜂。本取り組みは2015年5月に龍谷チャレンジプログラムに申請し、見事大学からの支援を勝ち取った。



藤岡ゼミ生が京都市自治記念式典で表彰

2015年10月、京都コンサートホールにおいて、京都市自治記念式典が開催され、経営学部・藤岡章子ゼミが表彰された。本式典は、京都市の発展に貢献した個人・団体を称え表彰するもので、藤岡ゼミは今夏、京都市上下水道局と協働で実施した「京の水カフェ」事業の取り組みが評価され、昨年に引き続いての表彰となった。



経営学部 三谷ゼミ「証券ゼミナール大会」にて優秀賞受賞

2015年12月、「2015年度証券ゼミナール大会」(主催:全日本証券研究学生連盟、協力:日本証券業協会)において、経営学部・三谷ゼミが34大学46団体583名の学生が参加したなかで、優秀賞を受賞した。「証券ゼミナール大会」は、金融・証券を学んでいる全国の大学のゼミの学生が、所定のテーマについて事前に論文を交換し、大会の場で討論するものである。本学の優秀賞受賞は、通算5回目となる。



理工学部がICTを活用した eラーニング入学前教育を実施

2015年12月、理工学部は、付属校入試に合格した生徒を対象に、ICTを活用したeラーニング入学前教育を実施。理工学部進学予定者には、「数学問題集」の反復学習効果をより一層高めることを目的として、今年度より、ICTを活用したeラーニング入学前学習サイト「Rstudy(アールスタディ)」の運用を開始した。こうした取り組みから、4月からスタートする大学での学びへの移行がスムーズになり、更なる学修意欲の向上が期待できる。



米国総領事による国際学部開設 記念講演会を開催

2015年10月、国際学部開設を記念して、米国駐大阪・神戸総領事Allen S.Greenberg氏による講演会が開催された。国際学部グローバルスタディーズ学科の学生を中心に他学部からも多くの参加者があり、会場は立ち見が出るほどの盛況であった。講演及び講演後の質疑応答は全て通訳を介さず英語でおこなわれたが、参加学生から多くの質問があり、講演時間よりQ&Aの時間が長くなる白熱したものとなった。



食用菊の加工品の試食および 新たな加工品の検討会を開催

農学部(代表:佐藤茂教授(農学部資源生物学科))では、「大津の特色を生かした地産地消推進モデルの構築プロジェクト(環びわ湖大学・地域コンソーシアム「大学地域連携課題解決支援事業2015」採択事業)に、大津市とともに取り組んでいる。その一環で2015年12月、大津市の伝統野菜である「坂本菊」を原材料に、漬物やジャム、キャンディなど9種類の加工品を参加した教職員や学生が試食。坂本菊の新たな調理法や加工品の検討をおこなった。



龍谷エクステンションセンター(REC)主催 第5回 REC BIZ-NET研究会を開催

2015年10月、龍谷エクステンションセンター(REC)主催で、全8回開催予定のREC BIZ-NET研究会の第5回目が、「ICTの発展を支えるディスプレイ・デバイス・電池・スマホの将来」というテーマで開催された。本学からは、理工学部電子情報学科の木村睦教授、石崎俊雄教授、学外からは、株式会社日本触媒、華為技術日本株式会社の方が講演され、懇親会は活発な意見交換の場となった。



陸上競技部が創部90周年祝賀会を開催。シドニー五輪出場の高岡寿成氏など卒業生も出席

2016年1月、陸上競技部は創部90周年祝賀会を開催した。陸上競技部は、1925(大正14)年の創部以来、日本学生陸上競技対校選手権(日本インカレ)をはじめ国内大会の入賞者や、国際大会出場者を数多く輩出してきた。当日は、高岡寿成(カネボウ陸上競技部監督)をはじめとする卒業生が多数出席し、近況報告や今後の豊富を語るなど、大いに盛り上がった。



パラオ共和国大使による経済学部講演会と学生の展示会を開催

2016年1月、経済学部は、パラオ共和国特命全権大使、フランシス・マツタロウ氏の特別講演会を開催。大使はパラオの環境保護の施策や日本との関係などについて講演し、英語、日本語で多くの質問や意見が出された。また、そのあとの「パラオ紹介の展示会」では、ボランティア・NPO活動センターの海外体験学習プログラム(パラオ共和国)の参加学生が、体験後の自主活動の一環として、現地で学んだことを大使ほかにプレゼンテーションした。



山岳部創部60周年記念海外遠征隊、アイランド・ピーク登頂を達成

龍谷大学体育局山岳部の創部60周年を記念して、アイランド・ピーク登頂をめざしていた海外遠征隊が2015年11月3日に、登頂を達成した。また、同行程で予定していた、ネパールのカトマンズ本願寺での故禿博信(カムロ・ヒロノブ)氏の33回忌法要および、ネパール震災復興義援金寄付も実施され、遠征隊は11月6日に無事下山。今回、OB部員に支えられ登頂を果たした現役部員、田中優さん(理工学部3年)は、感謝と今後のさらなる挑戦に意欲を見せた。



成人のつどいを開催 本学OGのつじあやのさんも登場

2015年12月、「第14回龍谷大学成人のつどい」が開催された。このイベントは1976年から始まった伝統行事であり、厳かな音楽法要やキャンドルサービスなどがおこなわれた。また、本学OGでシンガーソングライターのつじあやのさんの講演があり、「想いを歌にのせて」と題し、歌をまじえながら新成人に向けてエールが送られた。



龍谷大学と滋賀県が 包括協定を締結

2015年10月、龍谷大学と滋賀県は、相互に連携・協力しながら協働事業に取り組むことにより、滋賀の活性化などを図るため、包括協定を締結した。本学が、地方自治体と包括連携協定を締結するのは、大津市(2005(平成17)年3月)、鳥取県(2010(平成22)年7月)に続いて3例目となり、滋賀県が大学と包括連携協定を締結するのは、4例目となる。



次期経済学部長に 伊達 浩憲(だて ひろのり)教授を選出

(任期:2016.4.1~2018.3.31)

1995年4月に本学経済学部に着任し、2007年度に評議員を務めたのち、2015年4月からボランティア・NPO活動センター長となる。2016年4月より経済学部長の任に当たる。専門は日本の技術革新と産業組織を中心に研究している。



次期国際学部長に 久松 英二(ひさまつ えいじ)教授が再任

(任期:2016.4.1~2018.3.31)

2010年4月に本学国際文化学部に着任し、2012年度に教務主任を務めたのち、2014年4月から国際学部長に就任し、このたび2期目の就任となる。専門はキリスト教神学。とくに東方キリスト教神秘思想及びそれを軸とした比較宗教思想を中心に研究している。



次期法学部長に 橋口 豊(はしぐち ゆたか)教授を選出

(任期:2016.4.1~2018.3.31)

2002年に法学部に着任した。その後、教務主任、研究主任を務め、2016年度より法学部長の任に当たる。専門は国際政治で、とくにイギリス外交史を研究している。

10 | Book Café

新刊紹介

*値段はすべて税込価格で表示

*Book Caféについては龍谷大学
学長室（広報）まで

01

『「日の御子」の古代史』

平林 章仁(文学部教授)著

出版助成



古事記の「日下」の表記、古事記・万葉集の「日の御子」の称詞、古代天皇が仏教を受容できなかったこと、などから、古代天皇の本質と祖神信仰の歴史について考究。日本書紀の推古天皇の歌謡の「日向の駒」

の実像を解明、万葉集一六三七・一六三八番歌の「黒木・青草・逆ぎ」建物から、古代の聖性・他界観念について述べた。

2015年7月刊/309頁/塙書房/8640円

01

『みくまりの山』

～生野の変 龍野屋遺聞～』

みんなの本棚

泉 りょう(1975年度文学部卒業/
兵庫県)著



幕末の但馬に起こった生野の変。そして勝海舟の命による神戸での石炭開発。時代の波に翻弄されつつ力強く生き抜く人々を、残された日記を元に描く。

2015年10月刊/200頁/郁朋社/1080円/
書評「広報 朝来」2015年12月号、「読売新聞(播磨姫路版朝刊)」2016年2月2日

02

『夢中夢』

苗村 吉昭(1989年度経済学部卒業/
詩人/滋賀県)著

みんなの本棚



龍谷奨励賞や数々の詩集賞を受賞してきた著者の第6詩集。夢と現実、過去と現在が照応する30篇の詩により、真実の世界を表象しようとした意欲作。

2015年10月刊/101頁/編集工房ノア/1944円

03

『民衆詩派ルネッサンス』

苗村 吉昭(1989年度経済学部卒業/
大阪文学学校講師/滋賀県)著

みんなの本棚



大正詩壇に新風を巻き起こした「民衆詩派」の全容が、本書によって初めて明らかにされた。現代詩の鑑としての詩史研究姿勢にも注目が集まる評論集。

2015年11月刊/231頁/土曜美術社出版販売/
2916円/「朝日新聞(大阪本社版夕刊)」2016年1月13日付で紹介

04

『近代短歌の範型』

大辻 隆弘(1984年度大学院文学研究科
卒業/現代歌人集会理事長)著

みんなの本棚



斎藤茂吉の中年期作品、昭和期前半から活躍した佐藤佐太郎と前川佐美雄、戦後に活躍した歌人たちの作品などに関する論考を集めた評論集。

2015年11月刊/305頁/六花書林/2916円

出版情報

01:『「働き盛り」のNPO—ドロッカーに学ぶ「真の豊かさ」』

島田 恒(経営学部元特任教授)著

「一度きりの人生をどう生きるか」という問いに、自らの経験とドロッカー研究を重ね合わせた。信念の重要性を強調しNPOとの関わりを提案した。

2015年2月刊/204頁/東洋経済新報社/1620円

02:『ローカル・ガバナンスとデモクラシー—地方自治の新たなかたち—』

石田 徹(政策学部教授)編著

日本における地方分権の動向を前提にして、ローカル・ガバナンスに焦点を当てながら、デモクラシーの観点から地方自治の新たなかたちを探る。

2016年1月刊/224頁/法律文化社/2484円

03:『最新英語学・言語学用語辞典』

東森 勲(文学部教授)編著

語用論に関する用語をわかりやすく解説。その他最新の英語学・言語学の分野別に約3200語、11分野を簡潔に定義している用語辞典。

2015年11月刊/536頁/開拓社/4968円

04:『カレント臨床栄養学』

宮崎 由子(農学部教授)共著

臨床栄養の基礎から疾患病態別の栄養アセスメントと栄養ケアについてまとめ、日本人の食事摂取基準2015年版に基づいた栄養食事療法について解説。

2015年9月刊/343頁/建帛社/4104円

05:『情報法概説』

栗田 昌裕(法学部准教授)共著

情報に関する法＝「情報法」の世界を情報流通の実態に即して体系づけることで、分野横断的な情報法学ならではの面白さと深さにせまる基本書。

2015年12月刊/420頁/弘文堂/3564円

06:『我が子よ、かくあれ—『雄弁の道(ナフジュ・アルバララガ)』より聖アリーの手紙第31番和訳』

佐野 東生(国際学部教授)共訳

本書はシーア派聖典『雄弁の道(ナフジュ・アルバララガ)』の最も著名な手紙を、野元晋・慶應義塾大学教授らと共訳したもので、倫理の高さを示す。発行はイランで報道された。

2015年4月刊/132頁/『雄弁の道』研究所(イラン) /非売品

07:『[新版]現代医療の社会学—日本の現状と課題』

黒田 浩一郎(社会学部教授)共編著

医療の「今」を成り立たせる様々な要素とその複雑な関係を、中心/支持/周縁に分け、先進国での近代から現代への変化を追う。

2015年7月刊/280頁/世界思想社/2484円

08:『カワイイ社会学—成熟の先をデザインする』

工藤 保則(社会学部教授)著

「カワイイ」と「クルマ」と「低炭素社会」から、現代社会、そして近未来社会—カワイイ社会学—を考察する。(第25回橋本峰雄賞受賞)

2015年7月刊/146頁/関西学院大学出版会/1728円

書評「読売新聞」2015年8月30日、「山梨日日新聞」

2015年9月13日、京都新聞

09:『経営倫理とプラグマティズム—ジョン・デューイの思想に依拠した序説的考察』

岩田 浩(経営学部教授)著

主としてジョン・デューイの倫理・政治思想の考察を通し、プラグマティズムの視点から経営倫理学の新たな可能性を求めたもの。

2016年1月刊/325頁/文眞堂/3996円

10:『明解企業史研究資料集 総合商社鈴木商店関係会社編(全3巻)』

佐々木 淳(経済学部教授)編著

日本有数の企業資料コレクション「長尾文庫」(本学深草図書館)から総合商社鈴木商店関連の資料を蒐集し、復刻したもの。

2015年9月刊/2700頁/クロスカルチャー出版/140400円

広報誌「龍谷」からプレゼント！

龍谷ミュージアムペア招待券・・・・・・・・・・・・・10組20名様

龍谷カレー3個パック・・・・・・・・・・・・・5名様



ご希望の方は、はがきにご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号（龍谷大学関係者は卒業年度・学部なども）および広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。あて先は右記「プレゼント」係まで。

締め切りは5月31日(火)必着。

応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

広報誌『龍谷』81号 読者アンケートのお願い

今後のよりよい広報誌づくりのため、同封のアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。

なお、アンケートは、
<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>
からも回答していただけます。



読者のひろば

広報誌「龍谷」を読んで、学生のことを大切にしてきた伝統ある大学に進学させて良かったと感じています。
在学生保護者 O

関西を離れて全く龍大との接点がなく情報が入りませんでした。広報誌のおかげで卒業生などの活躍を知ることができ嬉しく思います。
卒業生 K

広報誌を拝読し、朝ドラ「あさが来た」に経済学部の龍大生が出演されるのを知り、楽しみにさせていただいております。
在学生保護者 T

お便り待っています

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。また、「龍谷人」などへの推薦や情報をお寄せください。いずれも以下のあて先まで。
※いただいた個人情報は広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

《プレゼント・お便りのあて先》

龍谷大学 学長室（広報）
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話：075（645）7882
FAX：075（645）8692
E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

編集委員

青戸 英夫、安食 真城、新井 潤、石橋 良太、井手 健二、乾 真理、上手 礼子、落合 雪野、笠井 賢紀、加茂 睦、末原 達郎、出羽 孝行、徳田 眞三、友永 雄吾、仁井田 都、西田 裕介、橋本 祐子、藤原 直仁、松浦 さと子、松本 賢、宮浦 富保、山口 大、若林 雅子（50音順）
事務局
増田 滋彦、田中 秀樹、田中 正徳、藤崎 智史

広報誌「龍谷」81号
2016年3月14日発行

編集：龍谷大学編集委員会
制作：龍谷大学学長室（広報）
発行：龍谷大学
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話 075(642)1111（代表）
龍谷大学ホームページURL
<http://www.ryukoku.ac.jp>



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY